

千束・たきな

ふたりのウエディングドレスがひとつに溶け合う初夜

サンプル

第四章 たきなで愛で花開く千束

千束をゆっくりベッドに沈め、その上に重なってゆくたきな。千束のスカートのフリルが大きな波のように広がり、二人を優しく包み込む。

「たきな……っ……」

千束の少し掠れた声が部屋に溶けていく。たきなの首筋に添えられていたサテンの手袋に包まれた右手が、デコルテから胸の方に降りてゆき、その頂をとらえた。

「千束……好き……」

たきなが千束のビスチェをずり下ろすと、ぷるんと豊満な乳房がこぼれた。

「……ちよっとたきなさん、手つきが手慣れてませんか？どこで練習してきたわけ……っ」

いつものように軽口で誤魔化そうと喉を震わせたものの、最後は甘い吐息となって途切れてしまった。

サテンに包まれたたきなの指が、乳房の蕾をとらえ、回すように優しく撫でる。ただ触れられているだけなのに、背筋を突風が駆け抜けるようなゾクゾクとした悪寒にも似た熱が走った。

「あっ……ん……たき、な……あ……あ……はっ……」

千束の口から、今までの人生で出したことがないような、甘い吐息が溢れた。

たきなの指先が描く軌跡に沿って、胸の奥から甘い熱がじんわりと溢れ出してくる。その熱は波紋のように全身へ広がり、指先に、足先に、そしてお腹の奥深くへと伝わっていく。いつもならどんな状況でも素早く動かせるはずの身体から、スーッと力が抜けていくのが分かった。

「……千束。力を抜いてください」

耳元で低い声で囁くたきなの呼気が触れ、胸の先がキュッと甘い緊張を抱えて小さく結ばれる。たきなの指先を押し上げるその微かな高まりは、千束自身にとつても一度も経験したことのない、自分の中に眠っていた「女」としての素直な反応だった。

「あつ……はあ……はあ……たきな……っ」

呼吸が浅くなり、視界が熱で少しだけ滲む。

誰かに無条件で委ねること。与えるばかりだった自分が、誰かの手によつてこれほど濃厚な愛と快楽を与えられるとは。

千束は無意識に自分を中心に広がるシルクのスカートのフリルをまさぐっていたが、ツルツルとした生地は捉えどころがなく、指がフリルの上で滑るだけだった。

たきなの濡れた熱を帯びた唇が、小さく結ばれた蕾をそつと吸い寄せた。次の瞬間、千束の肩が跳ねるように小さく跳ね上がった。

「あつ……それっ……なにっ……」

制止の言葉になりきらない声が漏れるのと同時に、胸の頂にふわりと柔らかく、けれど確かな熱を帯びた唇が重なる。

「は……あつ……!」

単に肌と肌が触れ合うのとは違う。唇から直接伝わるたきなの体温と湿り気が、まるで小さな電流のように胸の奥から全身の神経へと弾けていく。軽く吸い上げられるたびに、引き絞られるような甘い痛みが走り、それがすぐさまお腹の奥をキュッと疼かせる熱へと変わった。

今まで「戦うため」に最適化されていた自分の身体が、たきなの唇一つで簡単にとろけてゆく。

（なに、これ……こんなの……知らない……っ）

指先で撫でられるのとは比較にならないほど濃厚で、ダイレクトな愛撫。千束の胸の先は、たきなの舌先が転がるたびに甘く尖り立ち、誤魔化しようもない求愛の形を成している。

「千束……感じてくれているんですね……嬉しいです……」

唇を少しだけ離し、熱い瞳で見つめてくるたきな。

頭の中が真っ白になりそうな快感。与えられる愛の深さに呑み込まれながら、千束はただ、自分の中に目覚めた甘い飲びの波に身を委ねるしかなかった。

たきなが再び胸元へ顔を寄せ、さつきまで唇を重ねていた舌で、愛おしむように突起を転がし始める。背筋を駆け抜ける痺れるような甘い刺激に、千束は思わず身をよじらせた。同時に、たきなの右手が、胸元からウエストに結ばれたリボンの上を静かに滑り落ちていく。大きく開いたフリルの隙間を抜け、そのまま露わになった太ももへと、熱を帯びたサテンの指が届いていた。

柔らかい太ももを撫で上げる指先は、焦らすように右へ左へとあやふやな軌線を描きながら、ゆつくりと上を目指していく。これから訪れる甘い欲びの予感にじりじりと煽られ、千束は「あっ……ああ……」と小さな声を漏らしながら、ただ体に伝わる熱に身をゆだねるしかできなかった。

「ここも……私だけのものですよ、千束……っ」

たきなは千束のブライダルランジェリーの中に指を滑り込ませると、震えている蕾をとらえた。

（本編に続く）